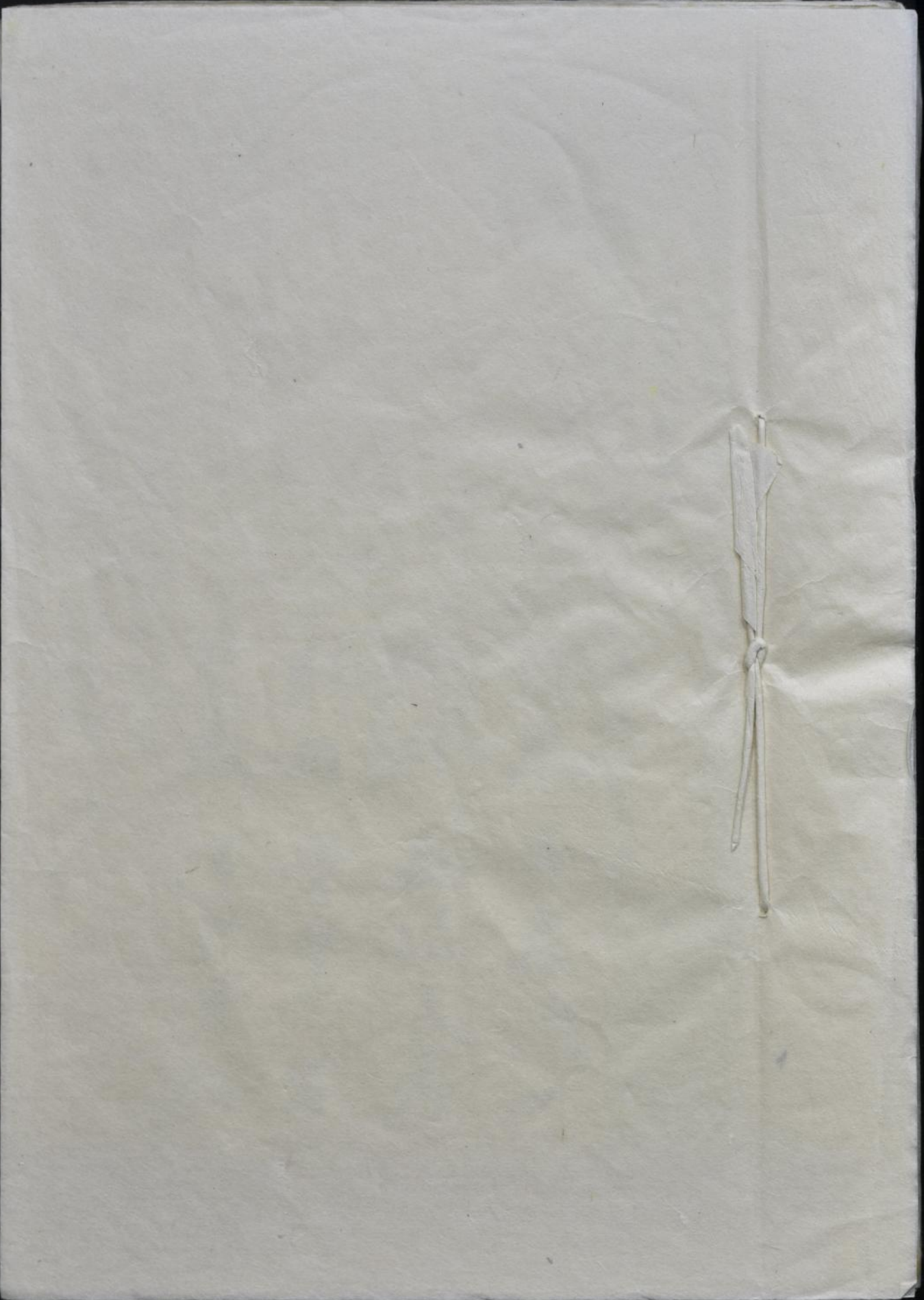




7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2



4 慧星会歌稿集

神来月森溪一  
桃村森野良秀  
红雨帝皇正男  
翠激河野岩屋

	2
	1-4
	86748
河野氏	
購(寄)研·他	島根女子短大 図書館

4 彗星会歌稿集

會。莫。知。薄。

神。來。

月。森。淺。一。

桃。村。森。昭。民。壽。

紅。雨。菅。原。正。男。

翠。激。河。野。岩。雄。

凡例

一、本誌は各會員自らの歌集とする

一、會員は本誌の發表を原の

新聞雜誌に托するも、二カ月前に

これを

但作者の署名を冒濫すること

を許さず

一、會員は稿本を況本誌事務局の

書きたるものなり

一、書きたるものは毎月五日毎に五  
首の外を五首とし、五日毎に南  
有幹車へ送付すべし

一、細目は各集巻の添付定  
し之に準じしるべし

一、紙葉の清記は他日の分類に  
便すため外巻毎に用紙を巴  
引すべし

菅原 弘雨

常々予君を思ひぬ 於夜水音高き  
樓に寝るれば

何ぞよは嘆きたりもや 君を思ひぬ 此一かき

心月の近づくを

人を世をさすく 兒ふ子とゆきぬ 冬夜

道は石をがれ 時を 15に 20の 25の

菅原弘雨

第二回



悲しみのひまに書く歌反古は積りて  
尺を減えんとするを

このしを金く断ちたる恋なれば才のお  
とろへを嘆しともせが

市し恋心のあるまに歌かたは悲し  
この新らしく痛く

○集二回

茶屋公家

○第四回

(十二月の自籍地分)

其一

菅原紅雨

悲しみを見せしと笑まひおの  
いざのそろ子寒し冬の日の雨

幽闇の<sup>色</sup>にうつる燈をわれを  
残して冬の夜明けぬ

あふらつ落葉か下におびきし  
竹の紅き花さく日を思ひ



左の窓<sup>まど</sup>暗<sup>くら</sup>澁<sup>しぶ</sup>と一<sup>いつ</sup>晴<sup>は</sup>りや、ぬれ<sup>ぬ</sup>れ<sup>れ</sup>心<sup>こころ</sup>に  
似<sup>に</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>。

果<sup>は</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>方<sup>は</sup>を<sup>を</sup>咄<sup>はな</sup>せ<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>迷<sup>ま</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>に  
道<sup>みち</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>わ<sup>わ</sup>お<sup>お</sup>程<sup>ほど</sup>回<sup>まわ</sup>る<sup>る</sup>。

旅<sup>たび</sup>家<sup>いえ</sup>の<sup>の</sup>思<sup>おも</sup>い

第六回 (一月五日締切)

昔に深紅雨

百萬<sup>ひゃくまん</sup>の<sup>の</sup>陣<sup>じん</sup>馬<sup>ば</sup>馳<sup>ち</sup>せ<sup>せ</sup>文<sup>ぶん</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>の  
胸<sup>むね</sup>の<sup>の</sup>高<sup>たか</sup>鳴<sup>なり</sup>う<sup>う</sup>君<sup>きみ</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>ほ<sup>ほ</sup>え<sup>え</sup>ぬ。

三千<sup>さんぜん</sup>里<sup>り</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>君<sup>きみ</sup>を<sup>を</sup>恋<sup>こ</sup>  
ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>る<sup>る</sup>。

大<sup>だい</sup>証<sup>しやう</sup>多<sup>た</sup>の<sup>の</sup>空<sup>そら</sup>朝<sup>あさ</sup>お<sup>お</sup>勢<sup>せい</sup>満<sup>まん</sup>天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>志<sup>し</sup>に<sup>に</sup>碎<sup>く</sup>  
子<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>。

誰れへも私にはあつたを  
の程またも心ありぬす。  
光りなま<sup>る</sup>希望を載せて  
身はあつたぬわん二十七。

第七回 (1040-1042)

菅原紅雨

第七回 (二月十五、締切)

□ 菅原紅雨

星一つ燦然として物比白の黒くちり行く  
夕空に照る

女こそげよ瑞ちしとさかしらに物の本あ  
び見し男言ふ

菅原紅雨

よと思ふこの歡樂にあきたるは死  
めを欲せず目のあらんかと

来と斗もまた来し年もあはれなく

肉の凍りも母に誇らまし

○第八回 (1544. 花)

○廿二 (八月廿二) 夕切

○廿二

菅 尔 紅 眼

病れたる眼ち△と表いふかよる口△何故死

いと強いたまはあや。

美はしき涙のちりするえきといふゆゑ酒は

の旅はせむじたらう。

三十七美き△人持たず酒飲し△と喧嘩けんか

もすれはせむじたらう。

△  
人は昔をたに馳すときわれ一人たの道も  
行くむはいはる。

△  
いとせき物り　　とわれならぬ表失のし  
まの年のあはれ。

△  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり

△  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり

其四

菅原紅雨

あが心常にわな戦くさうしん雙親と君とおもしろ俤三

ならぶ故。

世の中のすまのたから寶うば奪ひ得て君にまつ奉らば

喜おもしろからんか。

おとつきのつらつらをほ振りかし昔の人のおも面影

ぞ見ん。

あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり  
あはれと雨　　ふりふりふりふりふりふり

丈伸たけのびて黒髪くろかみ伸のびびて吾妹わが妹が十九じゅうの春はるの  
美うつくしきかき。

翠漱すいじゆえに弄璋りゆうぢやうクニ慶うらびありしとききて

天あめの世よの稚兒ちごは降くだりぬ青波せいはい海うみいざ謳うたはまし  
平和へいわの園そのに。

白菖しろあやう微い稚兒ちごの熟うまい寝いのかたはるかに可うた歌かよむ  
人の眼まなこの輝かがやき。

茅ちやう於お回まわ (二月十五にがつじゅうご日ひ卯う)

菅かや原はら紅べに雨あめ

や、寒さむさみ胸むねの春はるを南みな玉たまの首くびに代かへ  
まゝ心こころがひりぬ。

儂なまりの戀こひ心こころにはあらず、冷ひやかに十じゅう有ゆうるとき  
儼げん然ぜんとする。



くらがりの中は春さくさくふらふら見れば一人けちのす  
死のといふ又は

酒のまじり酒草も吸はせりあもせば暗まのこは  
我も見よつく

中が春よの夜のこかに啼なげ笑なゆるた舞ののまの  
濃きも思ふこ

花水も回春草(三ノ五ノ七)

△ 花水も回春草(三ノ五ノ七)

其の意 菅原紅雨氏

素、朝の空の此草の舞の中よりまよひを  
し不君。

九江に満ちうれしがあらず身は相模  
の園方に君を道つづく

花水も回春草(三ノ五ノ七)

54  
あな妖らしし獣の敵を充たせむとす人  
ごとし身を委す人  
一念は鏡き区路となりたれど白き肌  
を刺すも術なし

森脇桃村

夏之夜は露台の上に三つばき徳久  
利並べて唄じたまらぬ

悲しきは母の葬式げやうの真日よりつる見  
さる目と儂も云ふ

石工業は有六裸して藪やげに石切  
してぬぬぬ夏なつの書

三つばかり雲をつたふ籠にたんと打  
ち喜ぶし若き白思ひ

秋菓玉屋の床几の上に金色の鳥

と雲舟の散る銀杏の葉のそよ

あないたおしざうき雑木林はさるくくと

身震すあり秋風ふけば

森 詔 林

### 森 詔 林

しみじと物の哀を今日知ぬ君に列れ  
て行く秋の朝

一山は床と息つぎに雑林はあはたししく  
も木の葉の師らぬ

春の夜のうす明路をはきもの鈴の音

軽く行くたまき

森 詔 林



スことたぐ葉うつ音の枯樟しむと  
まじりて冬の日暮れぬ。

この日増しわがたのしきは又みこと 晴しと

すよりのみなりしに はしに さと さす

おしに 晴思ふ さす さす

星まじりて さす さす さす さす

森 頭 林 林

共ニ

本 船 枕 子

泥 どろ池 いけを み深 ふかき かぶ ごと みら く さす

し す こ も み 深 く た ま 家

限 か り あ く 深 く 悲 し み を こ と く

海 う み を も し と も と 思 ふ

月 つき が あ ら の あ ら の 少 橋 を あ や げ

流 なが り し 中 に 月 は の ま り ぬ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

かきほらうしよあまのことくち話す  
るんそとぬ鴨の水

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '鴨の水' and 'かきほらうしよ'.*

其ノ二

木林 梨 桃 村

虫のじと地の底けし冬眠の村にも  
あればあからましむ。

いふれば悲しきことのかくげかりさ

結けりやこの七口ほど。

酒のめば君とある夜半さうなとむ

ゆさむにえれ故にのむ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

丹酒屋のせにりボン響らしときこしか  
其の又こぎたぐぬ。

冬の夜半のわらじも締むる父の家の

廂に霽たしやる。

いとわかれ悲しきこととて水とて

まわればかきこもる。

忠告のじりみの感利しるる

其の二 木林 張 林 林

其の二

壽 桃村

カンテラの薄き先に燈をひし伯母を思ひ  
ぬ陸奥より

判任の薄踏の身は十銭のりボンに君が

情のぬぬ

指かみてらんだ踏みて見てありぬりボンの  
切れにあれ抛つ女  
(片)





△  
このまゝに死すともたんと厭ふべきか  
又決りつゝ其かゝるに及ぶ。

△  
北國のよき出る港の榎橋の上は足し子

志すれぬめかたの

△  
十人の

△  
十人の

其三  
木林 森 味 林

第九回 (二月五日 終り)

木林 脇 枕 村

午後十時死せるが如き夜の所を下駄の音  
高く帰来し足。

かかるときいかふる言ふかかきやわ不睦  
を左にける

掛箱のかけにわかれし君まちし冬夜の

度をかきしわさる

言ことばをひく、かしら歌と土地にこたへて願ねがふと

言ことばをひく、かしら歌と土地にこたへて願ねがふと

田た力りき等はは木の實みと喰くふ心もて廿にじゅうのとを

えらあすあす吸すひぬ。

千ち部ぶ十じゅう部ぶのの言ことば

林はやし囁ささや林はやし本もと

林はやし囁ささや林はやし本もと

其その二に 森もり脇わき村むら

年とし老らうひて心こころ残のこるむ一人ひとりの君きみふ志こころざしへ

こゝろをきく日ひに

新あらた金かねと真まの君きみとわかれは年としかた

みは盡つしなからむ

冬の朝うすき氷の上も行しじとき危き  
恋もあしかな

公園の古き Bench

桃木森林 氏彦  
二武時は頭をたれ

△其之ニ

no more  
A thousand years  
A thousand years  
A thousand years

桃木森林

10

Handwritten notes in Latin script, including phrases like "The forest is a..." and "The forest is a...".

○第一回

月森神来

山陰物開新  
年飾  
初一回分

戀歌はあまた歌ふところ曲の乱れ  
しに似て  
至き戀おし

一月四山踏  
三妻表  
歌イテ一覽  
今一(聖歌)

暗き森の中にも迷ひたふれ  
心地にふると別る

秋空はつとと別れを狂ほつるあが  
いたましき胸にさも似る

...  
...  
...  
...

...

...

...

...

...

...

...

丹毒神来

之るくに移りまぬは師、み名も忘れ  
んと下志恩の子は(興討所先主)

大才は心にもなす、偽をいひけるの事には白

髪すぬ

病みぬればク、鳴り鐘の音にさし候下弱り、

われとはなすぬ。

...

月とつれば夕日に赤うたれたる赤い山の  
根の家を海なる

別れては荒野の岸を死香ふく余をあ  
かた行く如きし

大正五年四月二十一日

五月廿一日

丹波神楽

丹波神楽

何故かしかとわかぬとを胸のつよき抱  
みに候をあるし。

この中前君とあかれしその目より  
悲しみの子を歌ひそめた。かゝる

花折すむすむの野はさうりまーわ  
びしきにおぬるをあかれて聞かぬ

美き花と賞めてある間に黒装の  
果祐の群下を奪ひ去られた。一  
清き室には夕に空に來る薄月  
心地な君を思ひし。月も  
心

花三味線  
花三味線  
花三味線

花三味線

其四

丹毒神来

渡りわたる行く日、心地も十年以來  
の恋人の去る

ふむ大地次く現空いつく飛ぶ・ある限

心なしのし

いつの頃よりかかきく目を恐れ暗室つを

あなを日性とほすはぬ

とほかに思はぬ子等のなることは殊更  
ぬきとありかたからむ

花は左に眺むるがよし女等は左を美人と

見てあるがよし

見とあるがよし

ebk r o the o

寂れをなに入日への菊から十母公集

此日 丹毒の集

廿四 丹毒神集

歌の末るその度ことに哀愁の唱り

吾色を君と別れと

その利那人石界ゆ意といふ事消え

昔とて呪ひけるかな

まさをした擇りぬしてある厚のに雲が心

を知らむ止みたま

事もち二十年経つれどもをなほ知れぬ  
いふ華をぬぎ

別も日濁くかなしきをいつはりて  
げなくしてゐぬ

此の世のまじりてはたのしみ

此の世

此の世

共

月夜 神来

谷の声に美を求めとききほけし十年所  
なるわれを恋しき

木枯の心し日なりしが君とわが恋、痛皮満  
と語りしかな。

脱夜の振り下にしめぬかた語りし子をな  
なほ忘れえず。

淋しい山嵐とものこつ梢たのこる秋  
木立かたみ

あなかなし川う沙渾を辿り行くその羊丸に  
似えう生かな

あなかなし川う沙渾を辿り行くその羊丸に  
似えう生かな  
あなかなし川う沙渾を辿り行くその羊丸に  
似えう生かな  
あなかなし川う沙渾を辿り行くその羊丸に  
似えう生かな  
あなかなし川う沙渾を辿り行くその羊丸に  
似えう生かな



月森神楽名

有山の上は雪さう夜もあはれは雪  
に映らふ白き物にしらき

散る本の葉木ちるぞわびたすにあまじ  
いに梢にのこりちやあもがきは

一言ふしむけしほごふ女にも情ふ

いふ喜しくしきお

仇人を殺せり子もろにさかべし  
うしやぶさるの習目らなしき

あの大河あやしくまたち長慈はわ  
かいたわしき胸を浸しぬ



五輪道がしる

其二

。月 木林 神 東

いからたまへ深きも際  
ころころごと高きもは  
る鳥の族と。

冬雨敗残のすが東一木の  
高橋に空く  
さまに清らかな。

柑子さく家の小せがつばらほ圖麴のえくぼをえん  
ばと足らぬ。

△

二十日 草壇より草を刈りて中たるは  
やぶこたのく。

晴よき二十日 木田より子と根の夜を  
出れに静んじ

・月 木林 斬 束

其二

其三

月 赤 神 束

日を掃ぬ月を掃ぬ大空の音は際ゆく  
至るの群かな

甲の子は蓬の如し乙の子は蒿殿に似たり  
すつべき

木灰もえて火と成るそのほかなるに  
似たるわらわ

徒然にええ下書きの日記よめは君のみ  
私なき頁なきかな

心なく灰書しつることどもを君に見えられてをし  
なめうれぬ

其四 月葬 神楽

西すれば西に達してか平凡のそのみ故に  
さめぬわが夢

諾といふその一言をいひ之ざる弱き性甲久  
あやに悪なり

歌はあふさはしわぬ性なりと知りてまた  
歌はよとしぬ

平かにたに たまひ 宿屋しとらふぬるちかき世  
の幸おほきかき

いんたぶが聞かせせしが君か名在まくだいごくと  
胸おとるかき

48.

*あまのてがね  
いんたぶが聞かせせしが君か名在まくだいごくと  
胸おとるかき*

河野翠漱

わがま わがま 酒杯をもる片時のよろ  
こびになぞ お 汝を忘ぬや

か いんめい 命をわつ子らんげか  
萬事 しんめい のま しんめい 失敗 しんめい 白す

い いんめい 心 いんめい をた いんめい ぬ いんめい も いんめい あ いんめい れ いんめい 水 いんめい  
づ いんめい ら いんめい ぶ いんめい と いんめい ち いんめい ゃ いんめい ち いんめい ゃ いんめい 水 いんめい

書讀のなれの儂酒のめが酒の  
聲に侍すめしあわ妹  
秋の雨降る日はひと日縁ちかく赤  
き衣を裁ちて居たやふ

河野翠燧  
世に...

第三回

河野翠燧

恋といふ不思議のちかういつせよ人間界  
の覇者となすけめ

若し君かところを人のうばやも人なりをか  
けと返さざらむや

若人の瞳はつねに何ものかゆるき歌  
すなわらひぬらむ

...

日はひと日夜は寝るの片ときも君ゆゑに  
きて年は経にけり

われ早くいつかごとくに慣れたれば君が涙  
に心うび出す

ゆゑしとわにけりしはあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

はるかに

第三回

河野早濑

なにとなく心さびしきかたはらに嫌  
なき、夜まのしみくとして

疾よ大きつばさのまのつゆをゆくとく  
疾よに志は倦まじ

カンテラを提げてわが行くは  
ま、道をとほくと行く

もつたふす夜か思ふこのわかき人の  
こころの幼きゆゑに

あまのこころをなごめよとまぐのをのふちがねり  
探り出さ

秋のあまのこころをなごめよとまぐのをのふちがねり  
夜のあまの月

あまのこころをなごめよとまぐのをのふちがねり  
あまのこころをなごめよとまぐのをのふちがねり  
あまのこころをなごめよとまぐのをのふちがねり

第三目

河野翠子

其二

河野翠子

酒のめばうれしきことのおきりあし  
耳に聴くもの目に見ゆるもの

わが心を  
おぼひこそはほしあまのこころ  
大杯に口ひき我のみ

十人に充ちぬ人数の宿のあそびど  
王侯を競ふ言十相を競ふ

悲しきと悼むをよきとあるあか友  
よんがれに我は同情をせむ

昔もあみ鏡もあみ帯  
阿彌の御衣もあみ帯  
まじり

よと語るころに母ありまのころよ  
仕ふる娘あり太平の御代

草のちやとうもあみ帯のこと  
月桂もあみ帯をるばる  
名壇をるるわらわ

其の二  
河野翠嶽

○ホ五回

河野翠嶽

其の二

海見れば海の底しきく山見れば  
山のたうがし放浪の子は。

田舎より田舎の町を渡り行く壮士

役者の群に入らむか。

「は」と答へ畏こまうたし物腰の

鬘に珍らし連ねて般らむ

この世の世は...  
とある...  
大男...  
酒と...  
十...  
直...  
よ...  
く...

○天十回

河野羽平

この日また町の酒肆のうすびら  
二階のぼもさほは度

われをかしさとも...  
け...  
わらひ  
白粉の剣

あま...  
あま...

このええん(こ)の柔本和ある男にも有りや  
と思ふ酒をめる時

焼酒セウチウと田の女と賭事カケと何れも友  
よと君は好める

あか女房尺八吹の藝人に取りえこ  
まふしゆく斗の暮

若狭より年々廻る江戸前の此方津波よりおんやしてを  
蒲葺の物珍の彩花をたもておんやを燕まよ

其の四

河野翠殿君

むらさきに霞も三十一は出ずのしよらうに  
こし春の水

あるときはは可哀やすもとこべに思ひしれども  
あはじやみらき

たやすげの雲雀のじこく物詰る人のたえに  
ある心地かな



鬼こおはまはんのん腕うでさま氷こるんすく極ごく寒かんの  
日の朝あさたま生なれぬ。

事こと繁しげきわづらりあまま世よにあてい  
字やらまるあふら寝ねすかたのよあまさ。

宝た玉まにに位い輝えけんとはれやあたに二つの  
瞳ひとみさくそのゆらにま。

其二  
月 卯 平 徴

意見書

なにもつに換ゆしきをまわが雅見よその病まは  
日ひす父は長へす

漸く書し

世よにあている三つのなは終はり度に死は死ぬる  
かからしき雅見よ。

危きかな

あはれその一呼あひらにおとろうて汝が他界  
すは成はり死ぬる。

49

抱きあり  
かみほとけ運きつはき  
の死のきりあがと  
さなごを忍び給らぬ

乳を呼ぶ

心臓の辨を行く血はあなうれし  
再び徳にぬり

そめなき

父よよ早もおやけ能  
えりあをきとまう  
おん目こら  
能はぬ

其。 凡そ此等

おかしき

かみはらへりてはまきつはるゝ人の心

さへもよみし給ひ

心を

心願の如く行ひてはなれしと

そめ

大正十一年三月十日